



2階・Gallery PARC

① 一枚物語 (原画)

2013～ クリームコットン紙に色ペン

② 同意のない出会い

2022 ミクストメディア

階段部分

③ 組み合わせの方法

2014～ 日用品、カッティングシートの文字 (言葉)

④ 意図的な偶然-12

2009 カーテン・布に文字 (言葉) を刺繍

⑤ 意図的な偶然-16

2009 レースカーテン・布に文字 (言葉) を刺繍

1階・エントランス

⑥ 意図的な偶然-14

2009 望遠鏡・布に文字 (言葉) を刺繍

1階・ショーウィンドウ

⑦ 組み合わせの方法

2022 日用品、ベニアの文字 (言葉)

1階・CAFE & BAR Slow Page店内

⑧ 一枚物語 (原画)

2013～ クリームコットン紙に色ペン

※ infomation

- 展示しておりますすべての「一枚物語」の原画は額装込み¥16,500[税込]で販売しております。詳しくは2階・ギャラリー・パルクのスタッフまでお声がけください。
- 会期中、1階・大垣書店にて、書籍『一枚物語』(アリエスブックス刊/2020年/192頁/¥1,760[税込])や5枚組ポストカードセット(¥550[税込])を販売しております。

event 01

クロストーク イベント

「『一枚物語』とその周辺のことについて」

牛島光太郎×目黒実×山下麻里

5月7日[土] 18:30~20:00 *予約不要 800円

牛島光太郎・『一枚物語』の出版に深い関わりを持つ目黒実氏・山下麻里氏をお招きし、作品・作家との出会いや書籍化にまつわるお話を中心に、「一枚物語」の魅力についてクロストークします。

牛島光太郎 / Koutarou Ushijima

美術家 1978年福岡県生まれ。言葉を用いた作品を制作。日本での活動に加えて、ドイツ、台湾、中国、ニューカレドニアなどで作品を発表。関西国際空港や百貨店の吹き抜け空間・ショーウィンドウなど公共空間への大規模な作品設置の他、里山や市街地でのアートプロジェクトを実施。個展、グループ展、多数。2017年より、松山市に在住。

目黒実 / Minoru Meguro

財団法人子ども未来研究センター代表理事 九州大学、京都芸術大学の教授を歴任。日本初のチルドレンズ・ミュージアムを、福島県伊達市を始め全国でプロデュース。近年では、絵本カーニバル、物語スコレに力を入れている。編・著書に絵本『鳥たちは空を飛ぶ』、『折る子どもたち』、寺山修司・宇野亞喜良との『五月よ 僕の少年よ さようなら』(アリエスブックス)などがある。

山下麻里 / Mari Yamashita

アリエスブックス発行人 九州大学大学院芸術工学府修了。2009年、目黒実と合同会社hactを設立。「子ども」や「本」をテーマに展示・イベントの企画デザインを行う。福岡市で「生の松原子どもスコレ」(現在は那珂川市に移転)を主宰、子どもたちにワークショップデザイナーとして携わる。2015年、アリエスブックスを設立、子どもの本の編集と装丁を行う。

event 03

ワークショップ

「知らない誰かのつくり話」

5月15日[日] 14:00~15:00 参加料=500円(当日)

対象 = 小学5年生以上

*要予約 (HP内の申し込みフォームか、会場にて受付)

ちょっとヘンな「一枚物語」は、ちょっとヘンな方法でつくられます。WSでは牛島が「一枚物語」を制作する時の「発想のジャンプ」方法を教えてもらいながら、ちょっと変わった紙や画材でテキストや絵を描いて、自分だけの「一枚物語」をつくります。出来上がったあなたの「一枚物語」は、お持ち帰りいただけます。小学5年生以上、大人でもお気軽に参加いただけます。



牛島光太郎

一枚物語 | 同意のない出会い

ちぐはぐな日々のはなし

2022年5月3日[火・祝] — 29日[日] 13:00~19:00

水・木休廊 入場無料 ※4日[水・祝]・5日[木・祝]は開廊 / 5月7日[土]のみ18:00で閉廊

Gallery PARC
GRAND MARBLE

event 01 クロストーク イベント

「『一枚物語』とその周辺のことについて」

牛島光太郎(美術家)×目黒実(財団法人子ども未来研究センター代表理事)×山下麻里(アリエスブックス発行人)

5月7日[土] 18:30~20:00 参加料=800円(「一枚物語」5枚組ポストカードつき) *予約不要

event 02 ギャラリーツアー

「牛島さんの話」

5月14日[土] 14:00~14:30 参加無料 *予約不要

event 03 ワークショップ

「知らない誰かのつくり話」

5月15日[日] 14:00~15:00 参加料 = 500円 対象 = 小学5年生以上

牛島光太郎(1978年・福岡県生まれ)は、一見すると無関係のようにも思える「もの と ことば」を組み合わせることで、そこに「ものがたり」の気配や予感“のようなもの”をつくりだす作品展開を続けてきました。

牛島の代表作ともいえる『scene』シリーズ(2003~)では、日常生活の中でとりとめもなく浮かんでくる場面や風景、出来事などを切り取り、それらを「もの と ことば」でつなげることで、展開や結末などが一切ない「シーン」をつくりだすことに取り組んでいます。また、刺繍された文字によるボリュームのある「ことば」と「もの」の組み合わせによる『意図的な偶然 / intentional accident』シリーズ(2008~)は、一見すると無関係な距離にも見えるそれらが、いつしか関係するような予感を鑑賞者に抱かせます。

ギャラリー・パルクでは2014年以来、8年ぶりの個展となる本展では、この『意図的な偶然』シリーズや『組み合わせの方法』シリーズの過去作品とあわせて、「もの と ことば」を組み合わせる方法を展開させた新作『同意のない出会い』のインスタレーションを展示いたします。

また、牛島によって「え と ことば」をクロッキー帳の上に組み合わせた作品『一枚物語』シリーズをあわせて展示いたします。

『一枚物語』は牛島が日常で気になっていた絵と言葉を用い、それらを組み合わせることで画面に絶妙な関係をつくりだすもので、一日一枚、6年以上に渡って描き溜められたこの作品は、書籍『一枚物語』(アリエスブックス刊/2020年/192頁)に纏められて出版されています。

このシリーズについて牛島は、

「イメージ」と「テキスト」が説明し合わないような作品を描き始めました。描き始めると、「イメージ」と「テキスト」が適切に説明し合わない関係をつくるのが、簡単ではないことが分かりました。相性の悪い2人の人間に、居心地の良い親密な空間を見繕うような繊細な作業です。制作にあたり、新聞や雑誌、映画やニュースなどで見聞きした場面や、日常生活で居合わせた場面をベースにしました。

『一枚物語』あとがきより

と語ります。なるほど、牛島によって描かれた「え と ことば」は、一見すると噛み合っているようでどこかズれているような関係にあり、鑑賞者はそのチグハグを結んだり、解きほぐしたりするように想像をもって画面に物語を探します。しかし、目の前のその画面をフィルムの一コマ(小さな物語)とするならば、ではそのコマの“前後”を想像してみようとする、なぜか全体(大きな物語)を掴まえることができなくなってしまうのではないのでしょうか。「一枚物語」は、確かにその一枚のクロッキー帳の上のみ物語を発見(想像)させているといえます。

本展は書籍『一枚物語』に所収された作品の原画とともに、牛島が日々描き溜めた「たくさん」の「一枚一枚」を一室に展示するものです。また『意図的な偶然』や『組み合わせの方法』、『同意のない出会い』などの牛島作品をあわせて体験することにより、ひとつの固定した物語をつくるのではなく、「なにか と なにか」の関係によって物語の生じる状況をつくり出す、牛島作品に通底する魅力をお楽しみください。

牛島 光太郎 Ushijima Koutarou

http://www.usijimakoutarou.com

牛島光太郎の「一枚物語」の制作風景

1978年福岡県生まれ。2017年より、松山市に在住。

言葉を用いた作品を制作。

日本での活動に加えて、ドイツ、台湾、中国、ニューカレドニアなどで作品を発表。関西国際空港や百貨店の吹き抜け空間やショーウィンドウなど公共空間への大規模な作品設置の他、里山や市街地でのアートプロジェクトを実施。個展、グループ展、多数。2020年4月に著書『一枚物語　ちぐはぐな日々のはなし』（アリエスブック）を出版。2020年8月に渋谷区宮下公園内ホテル「sequence MIYASHITA PARK」の客室(224室)に作品を設置。

<p>[C.V]</p> <p>おもな展覧会</p> 2021 個展「はなしのあとのはなし」(紺屋2023　401号室 / 福岡)
<p>文字模似言葉(ボダレス・アートミュージアムNO-MA / 滋賀)</p> 2019 個展「モノの居場所に言葉をおいたら、知らない場所までとんでいく」(3331 Arts Chiyoda / 東京) <p>まなざしのスキップ(札幌文化芸術交流センター SCARTS / 札幌)</p> 2018 六本木アートナイト2018(六本木の店舗、郵便局などに作品展示 / 東京) <p>Directors’ Selection – FOCUS(テツカヤマギャラリー / 大阪)</p> 2017 アンキャッチャブル・ストーリー (瑞雲庵 / 京都) 2014 個展「sceneのつくり方」(Gallery PARC / 京都) <p>イメージネーション・スーパーハイウェイ(京都芸術センター / 京都)</p> 2012 個展「意図的な偶然」(LIXILギャラリー / 東京) 2010 個展「意図的な偶然」(三菱地所アルティウム / 福岡)
<p>プロジェクト / 公共空間での作品設置</p> 2019 「えひめさんさん物語」(アーティスト in ファクトリー / 愛媛) 2016 「里山を編む」(九州大学ソーシャルアートラボ / 福岡) <p>「HUB-IBARAKI ART」(茨木市クリエイトセンター / 大阪)</p> 2011 「おおさかカンヴァスプロジェクト」(関西国際空港 / 大阪)
<p>レジデンス</p> 2012 Guangzhou 53 ART MUSEUM(広州, 中国) 2010 The association La Nature de l’Art(ヌメア市, ニューカレドニア) 2008 關渡美術館 Kuandu Museum of Fine Arts(台北市, 台湾) 2007 Kuenstlerhaus Dortmund(ドルトムント市, ドイツ)

<p>出版</p> 2020 「一枚物語 -ちぐはぐな日々のはなし-」(アリエスブックス刊)
<p>コミッションワーク</p> 2020 ホテル「sequence MIYASHITA PARK」の客室(224室)に作品設置(渋谷区宮下公園 / 東京)

展示作品について

「一枚物語」の制作風景

一枚物語 (書籍『一枚物語』あとがきより)

「一枚物語」の制作風景

この作品は、数年前、僕が何もつくる気になれなかった時期に取り組み始めました。

何もしないのもイヤだったので、1日1本、映画を観ることにしていました。

「一枚物語」の制作風景

その日も、いつものように寝る前に、DVDプレーヤーを再生しました。

フランスの映画で、とにかく不思議な映画でした。

場面の展開が異様に早く、音声は、しゃがれ声の男性が、ひとりで語り続けるというものです。

観終わった後、それは監督による解説の特典映像なのだと気が付きました。

おそらく、暗がりて僕がDVDのリモコン操作を誤ったのだろうと思います。

「一枚物語」の制作風景

この映像を観ながら、僕は、面白い、と感じました。

そして、その面白さの理由について考え始めました。

「一枚物語」の制作風景

僕たちの身の回りにある新聞や雑誌、漫画などの印刷物の多くは、写真やイラストなどの「イメージ」と「テキスト」によって構成されています。そして、「イメージ」と「テキスト」の多くは、お互いに補足し説明する関係にあります。テレビや映画などでは、「映像」と「音声」がそのような関係にあたるのだと思います。

「一枚物語」の制作風景

特典映像を映画として観てしまった僕は、流れている映像と音声のズレを、頭の中で補完しなければなりませんでした。僕は、この作業に面白みを感じたのだと思います。僕にとって、この鑑賞体験はとても新鮮なものでした。そして、「映像」と「音声」がズレているように、「イメージ」と「テキスト」がズレたような平面作品がつかれないかと考え始めました。

「一枚物語」の制作風景

それから、「イメージ」と「テキスト」が説明し合わないような作品を描き始めました。

描き始めると、「イメージ」と「テキスト」が適切に説明し合わない関係をつくるのが、簡単ではないことが分かりました。

相性の悪い2人の人間に、居心地の良い親密な空間を見繕うような繊細な作業です。

制作にあたり、新聞や雑誌、映画やニュースなどで見聞きした場面や、日常生活で居合わせた場面をベースにしました。

「一枚物語」の制作風景

この作品に、『1枚物語』と名前をつけ、1日1枚描き始めました。この制作は、その時期の僕の大きな支えとなりました。

「一枚物語」の制作風景

参考にできるような作品があまりなかったので、制作中に自問自答する時間が多くなりました。絵を描きながら、言葉を選びながら、それらを組み合わせながら、僕は自分が幼い頃のこと

を、とてもよく思い出しました。今のように、多少の言葉や、表現に向かう心の余裕や、それらを誰かにみてもらう手段を持ち合わせていなかった頃です。

「一枚物語」の制作風景

それがこの作品にどの程度影響しているのかよく分かりませんが、とても貴重な時間でした。

「一枚物語」の制作風景

このようにして『1枚物語』を描き始めてから約6年後、福岡市のアリエスブックスの目黒さんと山下さんから連絡がありました。2人は「1枚物語を本にしよう」と言ってくれました。

こんなヘンテコな作品を面白がってくれて、本という形にしたいと思ってくれる人がいるということが、本当にうれしかったです。

「一枚物語」の制作風景

絵と言葉がズれていて、物語がどこにも着地しないような宙ぶらりんの状態に魅力を感じています。

この作品を鑑賞するために、絵と言葉の間にある文脈のようなものを想像しなければなりません。その作業は、読者の方々のこれまでの経験や記憶、あるいは、本を開いたその日の心持ちなどによって行われるものだと思います。

「一枚物語」の制作風景

皆さんに、愉快的迷路を愉しんでいただければと思います。

「一枚物語」の制作風景

2019年8月の暑い日、海の見える福岡市のアリエスブックスのオフィスで、コーヒーを飲みながら、この本のタイトルや形や装丁などについて話した時間は、僕の人生において幸せな瞬間のひとつとなりました。

「一枚物語」の制作風景

できることなら、小学生の頃の自分に、見せてあげたいと強く思いました。

「一枚物語」の制作風景

（2019.9.14）

同意のない出会い Unconsented Encountering

自分の部屋に、幼稚園の頃の私と若い父が公園で手をつないでいる写真を飾っています。

「一枚物語」の制作風景

昭和を振り返る目的でつくられた本を読んでいると、あるページに掲載された写真に目が留まりました。その写真は、私が部屋に飾っている写真と同じ構図で撮影されていました。公園の広さや遊具もとてもよく似ています。おそらく、撮影された時期も近いのではないかと思います。

「一枚物語」の制作風景

それから、雑誌やインターネットなどから、同じような構図の写真を探し、集め始めました。

「一枚物語」の制作風景

集めた写真を並べ眺めていると、自分の個人的な記憶が奇妙な形でひらかれていくような感覚になりました。何かが交換されながら、自分と他者が入れ替わるようなこの不思議な感覚を自分なりに整理しようと思いました。

《同意のない出会い》は、この奇妙なひらかれ方と著書『一枚物語』で試行錯誤した言葉とモノの関係性について考えながらつくられた作品です。

「一枚物語」の制作風景

これは、私を含めた誰かの幼少期の物語であり、小さな歴史を保管する試みの1つです。

「一枚物語」の制作風景

（2019.9.14）

意図的な偶然 intentional accident

京都を引越す時に、友人が、メモ用紙にギターの絵を描いて渡してくれました。

ドイツに着いた日、部屋があまりにも殺風景だったから、私はそれを部屋に貼りました。

ドイツから日本に帰国する時に、私はそれを壁から剥がして、お財布に入れました。

日本に帰って、自分の部屋にそれを貼りました。

しばらくして、台湾に行くことになり、私はそれを持って行くことにしました。

台湾のスタジオにそれを貼っていると、遊びに来ていた台湾の友人が「これは何？」と私に聞きました。

私は考えたあげく、それを「お守りのようなもの」と彼に説明しましたが、それが何なのか、自分でもよく分かっていませんでした。

「一枚物語」の制作風景

2008年より、『意図的な偶然 / intentional accident 』と題した連作を制作・発表しています。

これは、日常生活で私が実際に拾ったモノや、私にとって思い入れのあるモノと、文字を刺繍した布で構成する作品です。

「一枚物語」の制作風景

（2019.9.14）

それまで価値の無かったモノが、何かをきっかけに価値あるモノにみえる時があります。

大抵の場合、それは錯覚だと思うのですが、私はそのことについて、もう少し知りたいと思っています。

「一枚物語」の制作風景

（2019.9.14）

『組み合わせの方法』は、「モノ(日用品数点)」と「言葉」を組み合わせた作品です。

「モノ」と「言葉」が指し示され合う関係ではなくなった時に、「モノ」も「言葉」も宙ぶらりんの状態になります。

私はこの「宙ぶらりんの状態」を大変魅力的に感じ、また物語を展開する方法として大きな可能性があるのではないかと考えています。